

ソローキンとパーソンズ

— 「文化システム」概念をめぐる —

大野道邦

はじめに

文化社会学の理論的な問題を明らかにするためのアルファかつオメガは「文化システム」の概念であると考えられる。本稿では、この概念をめぐる、ソローキン(Pitirim A. Sorokin 1889-1868)とパーソンズ(Talcott Parsons 1902-1979)の所説を比較検討し文化システム概念の意味合いを議論することによって、文化社会学への「文化システム」概念の理論的な意義について、その一端を明らかにしたい。

ハーヴァード大学におけるソローキンとパーソンズの確執は良く知られている。その原因は人事(講師から助教授への、助教授から准教授への、そして准教授から教授への、パーソンズの昇進に対するソローキンの消極的態度)や改組[ソローキンが学科長を務めた社会学科(Department of Sociology)からパーソンズ主導になる社会関係学科(Department of Social Relations)への変換]をめぐる葛藤であるが、本質的には、社会学=学問にかかわる両者のスタンスの違いによるものであろう。¹⁾

I 『社会的行為の構造』への評価

パーソンズは、助教授昇進の可能性を試すために、ソローキンに、あの『社会的行為の構造』の草稿を1935年に提出する。これに対して、ソローキンはあまり捗捗しい返事をしなかった。1935年11月21日、パーソンズ宛書簡によれば、次のような批評がなされている(Johnston 1995: 97-99)。第一に、技術的な点である。著述は長く緩慢すぎ、文章は晦渋で重要な箇所は追ってゆくのがむつか

しい。文体はカントの『純粋理性批判』あるいは、フッサールの『現象学』よりも厄介である。第二に本質的な点である。「……あなたの作品はいつてみればアメリカの90%の社会学者が『読めない』でしょう。……こういった『難解さ』の理由はあなたの考えに関するあなたの説明の仕方にあるのかもしれませんが。しかし、これはあなた自身の頭のなかで観念が明確になっていないことにもよるでしょう。……この理由から本質的ないくつかの欠点が挙げられるのです」。

戦後、世界の理論社会学者、社会学説研究者にとってまさに「聖典」となるものの草稿への酷評である。ソローキンの酷評は、草稿改訂のうえ、1937年に出版されたパーソンズの著書に対しても継続された。1960年代という、ソローキンとパーソンズが互いに両理論の対立から類似性や共通性を見出そうとする状況へと変わっていったとき(吉野 2009: 204-205)にもそうだった。

ソローキンは、おおよそ次のようないくつかの点において『社会的行為の構造』を批判する。(1)卓越した経済学者、社会学者たちの理論を、パーソンズ自身の「主意主義的行為理論」の先駆者として、その理論の「手段」として扱うのはいささか「僭越」である。しかも、ヴェーバーはともかく、マーシャル、パレート、デュルケームが、主意主義的行為理論に収斂していくという主張は無根拠である。かれら三者の理論を精査しても「主意主義」の痕跡は見出しえない。(2)パーソンズはこの著作が「経験的なモノグラフ(*empirical monograph*)」である、「経験的に検証された結論」であるといっているが(Parsons [1937]1949: 697-698=1974-1989: 5-91-92)、これも根拠なき主張である。この「経験的」なモノグラフは、むしろ経験的な事実を欠いているのである。ヴェーバー、パレート、デュルケームの各理論について検討吟味しても——パーソンズはこうすれば自分の主意主義的行為理論を経験的に検証できると見なしたのであるが——、パーソンズ自身が調査した事実に基づいてかれの命題を検証することにはならない。こういった吟味はただ、かれらの理論とかれら自身が自分たちの理論を確証すべく追究した事実を概観しただけであって、パーソンズの理論を検証するものではない。要するに、パーソンズは、これら古典社会学者の理論がかれら自身の集めた経験的証拠によって確証され正しい理論であると判断したにすぎない。(3)パーソンズの「単位」概念、「分析的要素」概念の定義に関しては

まったく理解不能である(Sorokin 1966: 403-408)。

さらに、(4)「文化」概念に関してはつぎのように批判している(*Ibid.*: 418)。のちの『行為の総合理論をめざして』や『社会システム』(ともに1951年)においては「システム」という全体論的・非還元論的な概念が前面にでてくるが、『社会的行為の構造』においては、「名目論的・原子論的」な行為理論が顕著であるため、「文化システム」の理論が不在である。たとえば、文化システムは、「非空間的かつ無時間的」、「時間のカテゴリーが適用されない永遠の客体(eternal object)」といわれており、また、「具体的な空間内客体および時間的出来事はシンボルとして文化的な側面をもっている」ともいわれているだけであり、ここには、「文化」に関していささか矛盾した扱いが見られる(Parsons [1937]1949: 763=5-183-184)。

以上のソローキンによるパーソンズの『行為の構造』への批判のうち、(1)の古典理論に対して自らの理論に強引に引き寄せた「パーソンズ固有の解釈」という見方については完全には否定できない。しかし、その他の批判点にはソローキンの誤解や理解不足があり、ここに両者の理論的スタンスや概念レベルの違いが見られる。

(2)の「経験的モノグラフィー」ではないという批判においては、「事実(fact)」概念に関して両者の違いが現れている。パーソンズにおいては、事実とは、かれが、解釈対象とした「事実について叙述した著者たちの理論」である。具体的には、「著者たちの公刊された作品」である。これらも「一つの実事」であり、観察し議論しうる「言語表現」である。この種類の事実の「観察」はこれら作品が使用している「言語シンボル」の「意味」の「解釈」を含んでいる。この解釈も「経験的な観察」である。そうでなかったなら、著者たちの作品も行為の主観的側面を含む他のあらゆるものごとく「科学的地位」を奪われることになる。つまり、パーソンズがいう事実は、「過去の社会学者の、事実についての理論」、「事実についての事実」という、いわば「第二次的なクラスの事実」なのである。これに対して、ソローキンが前提としている「事実」とは、通常観察された事実、すなわち、感官によって直接に把握された事実、「第一次的なクラスの事実」なのである。

(3)の「単位」、「分析的要素」については、パーソンズの「分析的リアリズム

(analytical realism)」に関するソローキンの理解不足がある。「単位あるいは部分」概念も「分析的要素」概念も、パーソンズによればともに「抽象化」の結果得られたものである。ただし、その抽象化の仕方は根本的に異なっている (Parsons [1937]1949: 31-35=1-60-66)。前者の概念の場合、たとえば、具体的な実体としての生きている「有機的全体」からその「部分=単位」(細胞・組織・器官)を引き離して取り出したとき、その部分=単位は以前と同じようには具体的に存在しているものとして観察しえないので、この「部分=単位」は一種の「抽象化されたもの」である。すなわち、この部分=単位は、「フィクション」であり「仮説的に存在する実体(entity)」なのである。要するに、この「部分」ないし「単位」概念は、「虚構」を指示している。

これに対して、後者の「分析的要素」概念は、われわれの実際観察するものもっぱら特定ケースにおける特定の「値(あたひ)」だけであるような「一般的属性」を指示しているがゆえに、抽象的である。たとえば、ある物体がある「質量」(一般的属性)をもつことは観察できるが、「質量」そのものは観察できない。ある行為がある程度の「合理性」(一般的属性)をもつことは観察できるが、「合理性」そのものは観察できない。この場合、質量、合理性は、「分析的要素」概念なのである。

パーソンズにおいては、このような分析的要素概念が前面に出ているのであり、概念はフィクションではなく、客観的なリアリティの一側面を把握できるとされる。具体的な現象は、この分析的要素のとり「値」の「組合せ」として、あるいは、この要素の組合せとして記述される。こういった意味で、パーソンズのスタンスは「分析的リアリズム」なのである (*Ibid.*: 730, 747-748=5-138, 162-164)。

したがって、ソローキンが、とくに、『行為の構造』以後の『総合理論を指して』や『社会システム』において、パーソンズの場合、例えば、パターン変数や価値志向や動機志向などの分析的概念の組合せを「概念の論理的な寄せ集め・ごった煮(hash, potpourri)」にすぎないと批判する場合 (Sorokin 1966: 432-433)、このような「分析的要素」概念の機能、すなわち、要素の結合=組合せによって具体的な行為や社会システムや文化システムを記述・説明しようとする役割を十分理解していないことにもよるだろう。

なるほど、ソローキン自身も、「分析的要素」概念に近い概念を使用しているが²⁾、それを十分意識しているわけではない。かれの認識論的なスタンスは、「分析的」と真っ向から反する「統合主義(integralism)」である。これは、社会的文化的システム、とくに、文化システムにおいて、「論理的=意味的な統合(logico-meaningful integration)」に焦点を当てる立場である。真理は、ただ、専ら、それぞれ、感覺的(感覺の真理)、超感覺的・超合理的(信仰の真理)、合理的(理性の真理)であるのではなく、これらを包含する「統合的真理(integral truth)」なのである。このように、かれの真理概念は、分析的であるというよりも総合的である(Sorokin [1937-1941]1962, vol.IV: 762-763; Ford 1963: 49-50; 吉野2009: 98-100)。

II 「文化システム」概念へ

さて、文化社会学の問題に中心的にかかわる、(4)の文化概念をめぐるソローキンのパーソンズ批判であるが、これについては次の二つの点に留意したい。

第一に、文化の外的・物的側面と内的・精神的側面の区分とそれらの関係である。第二に、ソローキンとパーソンズにおける文化システム概念の類似性である。

第一に、ソローキンは、パーソンズが、文化は無時間的・非空間的な抽象性をもちながらも、時間的・空間的な具体性をもっているという矛盾した主張をしていると批判する。だが、これは、文化が「シンボル・システム」としての特性を備えているところに由来する、文化の相補的な「二側面」なのである。

パーソンズは、こういった二側面を、「文化的客体(シンボル・システム)の客体の地位から内面化された地位への転移可能性(transferability)」と呼んでいる(Parsons and Shils, eds. 1951: 67=1960: 108)。要するに、文化は、一方において、行為者にとって外的な客体として存在し、他方において、行為者に内面化され行為の構成要素となる。文化は、シンボルであるがゆえに、「外的な客体(ノリモノ)」として客観的・具体的な状況のなかにあるとともに、同時に、パターン化された——時間、空間的に固定化され不動の——「行為志向(意味)」として行為主体のなかにあるのである。

実は、ソローキン自身も基本的に文化に関して同じことをいっている。文化には内的側面と外的側面がある(Sorokin [1937-1941]1962: 55-56, 66)。内的側面は「内的経験」の世界に属し、未統合のイメージ・観念・意志・感情・情動という未組織な形態、あるいは、これらの内的経験の要素から編成された思想体系という組織形態をとる。この側面は、「心意、価値、意味」の世界に属するのであり、「文化心性(culture mentality)」と呼ばれる。外的側面は、内的経験を具現化・具体化・実現化・外面化するような「客体・事象・過程」から構成されており、まさに、内的側面の「ノリモノ(vehicle)」なのである。そして、外的側面としての現象は、内的側面の表現(manifestations)であるかぎりにおいて文化システムに属するにすぎず、そうでなかったならばもはや文化システムの部分とはならない。

なるほど、パーソンズは「行為」という視点から分析的な用語で定義し、ソローキンは「心性」という意識的なものの視点³⁾からやや具体的な用語で記述しているという違いがある。けれども、パーソンズもソローキンも、文化というものがシンボルというメディアであることによって、内的・意味的世界と外的・物的世界の二つの世界にかかわり、これらを媒介しているということに気づいている点では両者の認識はそれほど離れてはいない。

第二に、両者の「文化概念」の比較をとくに「類似性」という観点からソローキン自身が提示していることに留意しなければならない。この場合、ソローキンは、『行為の構造』以降、パーソンズが急速に、社会システムや文化システムの問題に関心を移動させるにつれ、「かれの考え方はわたしのその方向に収斂してきたようである」といいながら、パーソンズの「オリジナリティ」の欠如をほめかしているのであるが(Sorokin 1966: 419, 421-423)。

ソローキンは、つぎのように、みずからの概念とパーソンズのそれとの類似性を提示している(強調点はソローキン自身)。

① 「パーソナリティ、社会、文化」

ソローキン

「社会学は、(a)社会システムや集積、(b)文化システムや集積、(c)その構造的側面におけるパーソナリティ、その類型、相互関係、そしてパーソナ

リティ・プロセス、に関する構造や動態についての一般化的な理論である」(Sorokin[1947]1962: 16-17)。「社会文化的な相互作用を構成する構造は、つぎの三つの相互に切り離しがたい側面を呈している。すなわち、(1)相互作用の主体としてのパーソナリティ、(2)社会文化的な関係やプロセスとともに相互作用するパーソナリティの全体としての社会、(3)相互作用するひとびとが所有する意味、価値、規範の全体としての、および、これらの意味を客観化、社会化、伝達化するノリモノの全体としての文化、である。……この不可分の三位一体(パーソナリティ、社会、文化)のおのおのは他の二つなくしては存在しえない。……教育的目的のためには、別々に研究されてもよいかもしれない。だが、三位一体のおのおのの分析の結論を出すには、おのおのがそのなかに存在するトリアード複合、あるいは、マトリックスに言及しなければならない」(Ibid.: 63-64)。

パーソンズ

「われわれは三つのシステム、行為の諸要素の組織化の三つの様式にかかわっている。これらの要素は社会システムとして、パーソナリティとして、そして文化システムとして組織化される。これら三つの様式は概念的には具体的な社会的行動から抽象化されるのであるけれども、この三つの抽象的概念が経験的に指示するものは同じ平面にはない」(Parsons and Shils, eds. [1951]1967: 54=1960: 88)。

② 「文化システム」の概念

ソローキン

「文化現象は他の文化現象との関係においては統合されている(連带的)であるか、統合されていない(中立的)か、矛盾している(敵対的)であるかである。二つ以上の、相互作用する、すなわち、因果的に連結する文化現象が論理的に、あるいは、芸術現象の場合、審美的に相互に首尾一貫して(*in a consistency*)存在するとき、それらは統合されている(連带的である)。これらは文化システムをつくっている。文化現象が論理的あるいは審美的に相互に無関係であるとき、それらは統合されていない。文化現象が論理

的にあるいは審美的に、首尾一貫せず矛盾しているとき、それらは矛盾している(敵対している)(相互に統合されていず、そして、矛盾している文化現象は「文化的集積(cultural congeries)」をなす)。文化現象の統合、統合欠如、そして矛盾は、等しく、イデオロギー的レベル、行動的レベル、物的レベルという文化の三レベルすべてにかかわってくる。意味、価値、そして規範が相互に、論理的または審美的な一貫性、無関係性、そして矛盾という関係にあるのみならず、顕在的行為や他の物的なノリモノも、それがそれぞれ意味、価値、規範を明確に分節し表現するかぎり、相互にこのような関係をなすのである」(Sorokin [1947]1962: 314)。

パーソンズ

「文化パターンは組織されてシステムになる傾向がある。このようなシステム化の独特の特徴は、われわれがパターンの一貫性(*consistency*)と呼ぶことができるような、あるタイプの統合である。信念システムの論理的一貫性であろうと芸術形式の様式上の調和であろうと一団の道徳的規則の合理的両立性であろうと、一群の文化パターンの内的一貫性(*internal coherence*)は文化の研究者にとってつねに重要な問題である」。「所与の文化におけるパターンの一貫性およびそれからの逸脱の程度を決めることは分析者にとって深刻な問題となる。明白な、または、顕在的な文化は、ほとんどつねにはじめは断片的に見え、その各部分が断絶しているようにおもわれる。ただ、特別な条件においてのみ、文化の創造者と担い手自身によって顕在的なシステム化が行われる」(Parsons and Shils, eds. [1951]1967: 21-22=1960: 34-35)。

③ 「有意味的な文化パターンの三形態」

ソローキン

文化的な「意味はつぎのように分類される。(1)語の狭い意味における認知的な(*cognitive*)意味。たとえば、プラトンの哲学や数学的定式の意味……、(2)有意味的な価値(*values*)。たとえば、その実現あるいは拒絶との関連における……宗教、科学、健康の価値、(3)基準として言及される規範

(*norms*)、たとえば、法や倫理の規範、エチケットの規範、技術規範など。これら三つの種類の意味は、有意味的(社会文化的)な現象の固有な諸側面である」(Sorokin [1947]1962: 47)。

パーソンズ

「つぎの三つの主要な種類の文化パターンを区分するのが便利である。(1)観念または信念のシステム(*systems of ideas or beliefs*)。カセクシスや評価は志向の成分としてはつねに存在しているが、この文化システムは認知的関心の優位(*primacy of cognitive interests*)によって特徴づけられる。(2)表出的シンボルのシステム(*system of expressive symbols*)、たとえば、芸術形式や様式。このシステムはカセクシス的(*cathectic*)関心の優位によって特徴づけられる。(3)価値志向(*value orientations*)のシステム。「評価は、真理性の認知的基準、適切性の鑑賞的基準、正しさの道徳的基準のいずれかの基準(*standards*)に依存している」(Parsons and Shils, eds. [1951]1967: 8, 5=1960: 11, 7)。

①の「パーソナリティ、社会、文化」に関しては、ソローキンは、社会文化的(有意味的)(*sociocultural or meaningful*)な「構造」の三側面として、パーソンズは「行為」の三側面として位置づけているという点では異なるが、基本的には、両者ともこれら三項が不可分であることについては一致している。ただ、パーソンズのほうは、具体的・経験的な行為現象から概念的に抽出された行為諸要素の組織化の三つの様式として、これら三項を「分析的要素」として明瞭に扱っているのに対して、ソローキンは、これら三項を具体的に存在する「実体」として眺めているようである。

③の「文化パターンの三形態」に関しては、両者とも、精神的機能や道徳的理想の伝統的な区分である真(知)、善(意)、美(情)に対応した文化の類型化を踏襲している。ただ、パーソンズが、認知的、カセクシス的、評価的な「行為志向」という「分析的要素」のいずれかへの関心の優位に留意して分析的に類型化をおこなっているのに対して、ソローキンは、例示をしながら具体的に三つの類型を挙げている。

②の「文化システム」概念については、ソローキンは諸文化現象の間において、パーソンズはひとつの文化システムにおいてではあるが、ともに、文化における「一貫性」について語っている。この点は、文化の問題を扱うにさいしては、注目すべきことである。

とくに、パーソンズは、文化システムにおける「統合」(パターンの一貫性)を「パターンとしての統合」と呼び、社会システムにおける「機能的統合」と区別する。文化システムは「パターンの一貫性を極大化しようとする命令」に従っており、いかなる状況であれ首尾一貫して「パターン=型」を貫徹しようとする。これに対して、すぐれて行為のシステムである社会システムは「機能的命令」(希少性に由来する共存可能性や有機体的欲求の充足)に柔軟に従う。したがって、パターンの命令(意味・価値・形式の一貫性の要請)に従って文化システムを純粹に維持しようとするならば、機能的命令(可変的な状況の要請)に適応しようとする社会システム(そしてパーソナリティ)と緊張関係に陥る。ここに、文化の「理想」と社会の「現実」とのズレや葛藤という問題が生ずる(Parsons and Shils, eds.[1951]1967: 172-176=1960: 273-278; 作田 1972: 72-82, 参照)。

そして、ソローキンにおいては、文化的統合における「一貫性」は、とくに、論理的に統合された文化システムに見られる「自律性(autonomy)」につながり、こういった自律性を、ソローキンはシステムに固有な「内在的な自己=規制と自己=指向(immanent self-regulation and self-direction)」の原理と呼ぶのである(Sorokin [1937-1941]1962, vol. I: 50-51)。また、ソローキンにあっては、一貫性をもちえない文化現象間の矛盾・対立・無関係にも注意が払われている。

以上のように、文化システムの「一貫性」は、「パターン統合」、「自律性」、「内在性」という文化システムの重要な特性と関連するのである。

Ⅲ 「内在性」と「意味と価値」——『社会的文化的動態』をめぐって

さて、パーソンズには、ソローキンのパーソンズ『行為の構造』などへの激的な批判に比べれば、おだやかな形であるが、ソローキンのパレート、デュルケーム、ヴェーバー解釈への批判がある⁴⁾。しかしながら、むしろ、かれは自著の『行為の構造』において、ソローキンのいくつかの点を肯定的に評価して

いる。

1 内在性

まず第一に、社会「『内在的(immanent)』発展」における「内在的」という概念に関してである。第二に、価値要素とその「論理的=意味的統一(logical-meaningful unity)」の問題である。まず、「内在的」という概念について議論してみよう。

パーソンズは、『行為の構造』初版(1937年)の「序文 問題」において、「こうした変化[社会についての解釈の変化]はかなりの程度、経験的事実そのものに関する社会理論や知識群の内部の『内在的』発展によるものだった」(Parsons[1937]1949: 5=1974-1989: 1-21)と述べている。そして、この「内在的」という語はソローキンの使用するものと本質的に同じであると注記している⁵⁾。さらに、後年、共編リーディングス、『社会の諸理論』(1961年)において、ソローキンの『社会的文化的動態』の改訂縮約版([1957]1985)の終わりの部分(第9部38章のII)“Some Implications of the Principle of Immanent Change”を、第5部(「社会変動」)セクションB(「安定化と変動の過程」)の5(“The Principle of Immanent Change”)として掲げている(Parsons *et al.*, eds. [1961]1965: 1311-1321)。

ただし、ここで「内在的」という場合、パーソンズとソローキンでは、その水準が異なっていることに注意しなければならない。パーソンズの場合、社会的行為に関する科学理論のレベルにおける「内在的」な展開なのである。かれは、主意主義的行為理論に、それぞれ異なった知的背景をもつ社会学者(たとえば実証主義風土に基づくデュルケームとドイツ観念論に育まれたヴェーバー)たちが類似の過程を経て到達したと主張する。この収斂は、かれらの個人的感情、知的伝統、階級の地位、国民性の単なる結果ではない——かれらはこのすべてにおいて異なっている。この収斂=一致は、かれらの当初の理論システムの構造に固有の関心方向と、その後に見えられ付加されたあたらしい経験的事実との「相互作用」の結果なのである。要するに、パーソンズが「内在的」というとき、「一方における事実に関するあたらしい洞察と知識、他方における理論システムにおける変化、この二つのものの互酬的な相互作用」による科学理論の内的な発展のことをいっているのである(Parsons [1937] 1949: 11-14,

これに対して、ソローキンの場合、かれの『社会的文化的動態』第1巻(1937)において、文化システムの内的側面である、「心意、価値、意味」の世界、すなわち、「文化心性」の世界のレベルにおける「内在的」な展開を問題としている。この心性は、「内在的な自己=規制と自己=指向」の原理に従って展開する。一般に、社会的文化的システム、とくに、文化システムは、その機能化や変動においてある程度の自律性や固有の自己=規制を有している。すなわち、外的、物的、さらには社会的な諸条件から独立し、それに「抵抗(immunity)」している。

なるほど、このシステムは、自らに影響を及ぼす外部のさまざまな客体やエージェントを選択しつつ、あるものを取り入れあるものを排除するという点では外の作用をいくぶんか受けている。だが、論理=意味的な統合としての「文化システム」は、それ自身の、機能化、変動、運命の論理を有しており、これは、外的な情勢の単なる結果ではなく、それ自身の本性の結果なのである。いってみれば、システムの機能化や進行の最も重要な「決定者」の一つはシステム自身のなかにあり、それに固有なものなのである。この意味で、内的に統合された文化システムは、自律的な自己=規制と自己=指向の統一体(unity)である。システムのライフ・コースは、システムが生まれたときに既に本質的に書き留められているのである(Sorokin [1937-1941]1962, vol. I: 50-51)。

こういった内在的な展開を、一層、具体的にいえば次のようなことになる。それぞれ固有の「大前提(major premises)」に立つ文化心性の三つの型、すなわち、観念的タイプ、理想的タイプ、感覚的タイプは、この順序で、内在的に変動するということである。観念的な文化心性〔内的な文化システム〕は、「リアリティ(实在=現実)(reality)の性質」が非感覚的、非物質的、永続的な存在として知覚され、「欲求や目的」が霊的であるような「大前提」に立つ。その正反対に、感覚的な文化心性は、リアリティを感覚器官にとらえられるがままに見、超感覚的なリアリティを求めず、欲求や目標が物的であるような大前提をもつ。これら二つのタイプの論理的に統一された「混合」タイプである理想的文化心性においては、観念的な前提と感覚的な前提がひとつの首尾一貫し調和した統一をなしている。リアリティは多面的であり、霊的なものの永遠不滅の

「存在」側面と物的なものの不断に変化する「生成」側面をとともにもっており、欲求や目標は物的なものを靈的なものに従属させながらも靈的であるとともに物的でもある (*Ibid.*, vol I: 66-76)。

観念的文化(心性)は、「内在的變動(immanent change)の原理」に従い、システムに内在的な力によってまったく対極的な感覺的文化(心性)に向かおうとするが、「限定された可能性(limited possibilities)」の原理によりシステムの自律的なさらなる展開の「限界」に達し、弁証法的に観念的文化(心性)へ逆戻りしようとして両極端(観念的/感覺的)の微妙な調和である理想的文化(心性)として一時的な均衡を保つ。しかし、この均衡は不安定であり最終的に感覺的文化(心性)へと向かうのである (Sorokin [1937-1941]1962, vol.IV: 737-738; Johnston 1995: 110; Jeffries 2002: 111)。

さて、ソローキンのこういった文化心性の概念は、「知識社会学」の領域というならば、マケイが位置づけているように、文化要因を強調するタイプの知識社会学に繋がるだろう。それは、マンハイムの知識社会学のように、「存在要因」を強調するものではない。だが、文化心性は、非内在的ではないが、社会に影響をあたえ社会に共有されているような観念、感覺であるかぎり社会的要因であり、科学や宗教や芸術などの個々の文化(知識)領域にとっては外的な要因である。したがって、ひとつのタイプの知識社会学といえることができる。このように、ソローキンの「文化心性」は「内在的」ではあるが、「上位システム(supersystems)」として、科学、宗教、芸術などの下位システムを相対的に統一する (Maquet [1949]1969: 245-247; Sorokin [1937-1941]1962, vol.IV: 138-139; 大野・コルネーエヴァ 2010: 134-137)。

この場合、パーソンズの内在性とソローキンの内在性はどのように関連するのか。パーソンズの内在性は、科学という文化の下位システムのレベルにおける「内在的變動」(理論と事実の相互作用)であった。これに対して、ソローキンのそれは、文化心性のレベル、すなわち、文化の「上位システム」のレベルにおける「内在的變動」(観念的→理想的→感覺的な文化システムという三段階の律動的變動)である。パーソンズは科学の展開がその外にある知的、文化的状況から独立して生起することを証明しようとした。ソローキン自身も、下位の文化システム(科学)の統合の度合の高さが、究極的な決定因としての上位の文化心

性からの相対的な独立性の一因となるのであると示唆している (Sorokin [1937-1941]1962, vol. II: 474; vol. IV: 610)。要するに、科学と文化心性という二つのレベルにおける「内在的変動」は相互に相対的に独立して展開するということなのである (Cf., Sorokin [1957]1985: 638-639, 645)。

2 価値と意味

第二に、「価値」と「論理的＝意味的統一」の関係である。パーソンズは、ヴェーバーの「習慣(Brauch)」論に関連して、趣味(嗜好)や芸術や娯楽に含まれる規範的、価値的要素についての議論の文脈で、「価値態度(value attitudes)」が行為の構成要素であり、この要素は、ソローキンの意味における「論理的＝意味的な統一(logical-meaningful unity)」に属していると注記している (Parsons [1937]1949: 680 note3=1974-1989: 5-65, 注1)。いってみれば、価値態度とその表現様式である活動や所産の具体的な形態との間には「有意味的な対応」があり、これらは、ひとつの「意味連関(Sinnzusammenhang, complex of meanings)」に属しているのである。したがって、一方では、活動やその所産(芸術作品など)は首尾一貫したゲシュタルトをなすのであり、他方において、それらが価値態度を適切に表現しているかどうか意味解釈することができる。たとえば、中世のゴシック様式のカテドラルは、トーマス・アクィナスの『神学大全』に定式化されているようなカトリック精神(価値)の意味的解釈をとおしての「表現」であると考えられる (Ibid.: 680=5-64)。

要するに、「価値」は、一方において「論理的、意味的に解釈」され⁶⁾、他方において「芸術的、形態的に表現」される。それゆえ、価値、意味、表現はひとつのシステムあるいは統一をなしているのである。

このことは、まさに、ソローキンが、文化システムのうちもっとも統合度が高い「論理的＝意味的な統合」について主張している点である。この統合は「最高の形態」における統合である。それは、諸単位間の関係の単なる「斉一性(uniformity)」のパターンから成る「因果的＝機能的統合」とは異なり、諸部分がまさに「縫い目なき衣」を形成しているような統合である。たとえば、カントの『批判』の諸章、ミロのヴィーナスの頭と胴体、ベートーベン交響曲第3番の第1楽章の冒頭とおわり、シャルトル大聖堂の基礎・飛び控え(飛梁)

・塔・彫刻などはそれぞれこのような統合をなしている (Sorokin [1937-1941] 1962, vol. I: 18-19)。

ソローキンは論理的＝意味的な統合を発見する手続きは、ジグソーパズルにおいて多くの無意味な「断片」をひとつの「論理的秩序」あるいは「ひとつの意味的な統一」あるいは「理解可能な全体」に並べ替えるようなものであるともいっている (パーソンズもソローキンの「ジグソー法」に触れているが) (Sorokin *ibid.*: 19; Parsons [1937]1949: 680=1974-1989: 5-64)。

このように譬えられた、カオス(無意味)を秩序づける「論理的＝意味的な方法」に関して、ソローキンは次のように明白に述べている。「関係の斉一性が因果的に統一された諸現象の公分母であるならば、論理的＝意味的な統一においては、公分母は中心的な意味あるいは観念の同一性(identity of central meaning or idea)である」「あらゆる論理的に関連する断片に浸透しているのは、中心的な意味、観念、あるいは精神的傾向の同一性(類似性)なのである」(Sorokin *ibid.*: 23, 24)。そして、芸術作品も同一性として「首尾一貫的なスタイル(consistent style)」を保持しているのである (Sorokin *ibid.*: 20)。

以上のように、パーソンズにおける「意味連関」としての「価値・意味・表現の複合」、ソローキンにおける「論理的＝意味的な統合」は、ともに、文化システム特性(内包)を正鵠に言い当てている。ただし、パーソンズの場合には、価値態度という用語に窺われるように、文化システムを行為者の動機や内面に関係させており、これに対して、ソローキンにおいては、文化システムは文化心性(意識)のレベルで個々の行為者を超えたところで問題となっている。

おわりに

ソローキンとパーソンズは、とくに、ソローキンのパーソンズへの攻撃的態度に目を奪われると、文化に関して、両者の懸隔は著しいように見える。だが、主として、『社会的文化的動態』(1937～1941)、『社会的行為の構造』(1937)を「文化システム」概念に関して吟味してみるならば、両者は、重要な点において、「収斂」していたといえよう。

なるほど、ソローキンは統合主義、パーソンズは分析的リアリズムとその認

識論はことなる。また、文化の問題とするレベルがずれていることもある。だが、次の三点において両者はある重要な知見を共通に得ていたといえよう。

一つは、文化システムの「内在性」である。文化はけっして社会や有機的、物的世界などの外的状況や条件に従属せず独自の「自律性」を保持しつつ、構造的にも動的にも存在・存続しているのである。これをソローキンは「文化心性」の内在的変動として、パーソンズは理論システムの内在的展開として捉えた。二つには、文化システムが「価値・意味・表現」の複合体あるいは統一体であるという点である。これをソローキンは「論理的＝意味的な統合」として、パーソンズは、「意味複合」として捉えた。

最後に文化システムは、その内的側面と外的側面の両側面にかかわる「シンボル・システム」でもある。これをソローキンは、文化心性(心意・価値・意味)と、「ノリモノ」によるその具体化・外面化として、パーソンズは、文化の「客体から内面への転移可能性」として特徴づけた。

以上のような、ソローキンとパーソンズの比較によって得られた、文化システムにおける「内在性」、「意味・価値性」、「シンボル性」の諸特性は、文化社会学の領域において、文化現象の説明を非文化的な要因(社会や経済や政治や環境や心理など)に還元しざる「文化についての社会学(sociology of cultures)」から、文化的要因の自律性やシンボル＝意味性やシステム＝構造性を強調する「文化的社会学(Cultural Sociology)」への移行(大野 2011: ii～vii)を一つの角度から確認するものであろう。

注

- 1) ソローキンの知的発展をその生涯と関連させた Johnston (1995) の業績、3～5章参照。なお、日本における最近の総括的なソローキン論には吉野(2009)の業績がある。さらに、藤田(2004)の論文も示唆的である。なお、パーソンズとソローキンの確執については、高城(1992: 102-108)が扱っている。
- 2) ソローキンは、文化のタイプを分けるとき、まず、観念的タイプ(Ideational type)と感覚的タイプ(Sensate type)に区分するが、これら二タイプは純粹型として具体的に存在するわけではないと考えている。実際に存在する文化は、これら二つの論理＝意味的な形式の組合せ＝結合なのである。「観念的」、「感覚的」は、全体としての文化を名づけるとともに、これら文化の構成要素のおおのの性質を特徴づけ

ている。したがって、現実の文化はどちらかの構成要素が優越しているのであり（観念的文化は観念的要素が、感覺的文化は感覺的要素が）、これら両タイプあるいは両構成要素の均衡のとれた文化が理想的タイプ(Idealistic type)なのである(Sorokin [1937-1941]1962, vol. I: 67-68)。

- 3) 吉野は、ソローキンの文化論を、超意識(super-consciousness)、意識(mentality)の視点から詳細に扱っている(吉野 2009: 135, 169, 223-225)。
- 4) たとえば、パレートの「残基(residue)」は、「感情」の「表現」であるのに、それを「感情」あるいは「心の状態」そのものと同一視するソローキンの解釈を批判し、そして、デュルケームの拘束概念を、タルドのデュルケーム批判に倣い狭く「強制作用」としてのみ捉え「道徳義務」としての拘束概念を見逃していると批判している。さらに、ヴェーバーが近代資本主義は専らプロテスタントの西欧のみに成立しそれは非プロテスタントの文化には移植不能であるとしたことは日本の例に見るごとくヴェーバーの誤りであるとした点については、ヴェーバーはけっしてそのようなことはしていないとこの点も含めソローキンのヴェーバー読解の不十分さを指摘している(Parsons[1937]1949: 198-199, 385, 552-553=1974-1989: 2-107-108; 3-119-120; 4-126-127)。
- 5) 2011年9月に、カナダのサスカトゥーン市のサスカチュワン大学図書館の「ソローキン・コレクション」(The Pitirim A. Sorokin Collection)を訪れたが、所蔵の、パーソンズからソローキンへの『行為の構造』初版の献辞入りの贈呈本(New York and London: McGraw-Hill, 1937)には、ソローキンのそれほど好意的ではない書き込みが比較的多くある[たとえば、最後のほうのデュルケーム論のまとめの箇所(713頁)には頁上部余白におおしく「これはすべてパーソニズムであってデュルケミズムではない」と書き込みがある]。しかしながら、パーソンズがソローキンに肯定的に触れているこの箇所[「内在的」(5頁)]、および、あとで触れる「論理的=意味的な統一」(680頁)の所には書き込みはない。自分(ソローキン)の概念への言及などはパーソンズのオリジナリティのなさを示していると思ったのであろうか。なお、ソローキン・コレクション調査にさいしては特別コレクション司書のDavid Bindle氏、アシスタントのRita Chillak氏のお世話になった。さらに、科研究協力者のコルネーエヴァ・スヴェトラーナ氏(帝京大学助教)の協力も得た。
- 6) ソローキン自身、価値(value)を「意味のシステム(the system of meanings)」としている(Sorokin [1957]1985: 644)。

文 献

Alexander, Jeffrey C., 2003, *The Meanings of Social Life: A Cultural Sociology*, Oxford:

- Oxford University Press.
- Ford, Joseph B., 1963, "Sorokin as Philosopher," Philip J. Allen, ed., *Pitirim A. Sorokin in Review: The American Sociological Forum*, Durham, N.C.: Duke University Press, 39-66.
- 藤田弘夫, 2004, 「ある社会学者の闘い——P・A・ソロキンの数奇な生涯」『法学研究』(慶應義塾大学法学研究会)77(1): 149-184.
- Jeffries, Vincent, 2002, "Integralism: The Promising Legacy of Pitirim A. Sorokin," Mary Ann Romano ed., *Lost Sociologists Rediscovered*, Lewiston, New York: Edwin Mellen Press, 99-135.
- Johnston, Barry V., 1995, *Pitirim A. Sorokin: an intellectual biography*, Lawrence, Kan.: University Press of Kansas.
- Maquet, Jacques J., [1949] 1969, *Sociologie de la connaissance: sa structure et ses rapports avec la philosophie de la connaissance: étude critique des systèmes de Karl Mannheim et de Pitirim A. Sorokin*, avec une préface de F.S.C. Northrop, 2^e éd., Bruxelles: Editions de l'institut de sociologie de l'université libre de Bruxelles.
- 大野道邦, 2009, 「イントロダクション 文化の社会学のパラダイム」大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学』文理閣, 13-30.
- , 2011, 『文化社会学の可能性——カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社.
- , コルネーエヴァ・スヴェトラーナ, 2010, 「ソローキン再訪——文化社会学の巨人——」『京都橘大学研究紀要』36: 133-152.
- Parsons, Talcott, [1937]1949, *The Structure of Social Action*, 2nd ed., New York: Free Press.(=1974-1989, 稻上 毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造』1～5, 木鐸社.)
- , 1967, *Sociological Theory and Modern Society*, New York: Free Press.
- and Edward A. Shils, eds., [1951]1967, *Toward a General Theory of Action*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.(=1960, 永井道雄・作田啓一・橋本 真訳『行為の総合理論をめざして』日本評論新社.)
- *et al.*, eds., [1961]1965, *Theories of Society*, one volume edition, New York: Free Press.
- 作田啓一, 1972, 『価値の社会学』岩波書店.
- Sorokin, Pitirim A., 1928, *Contemporary Sociological Theories*, New York and London: Harper & Brothers.
- , [1937-1941] 1962, *Social and Cultural Dynamics*, 4vols., New York:

- Bedminster Press.
- , [1947] 1962, *Society, Culture, and Personality: Their Structure and Dynamics*, New York: Cooper Square.
- , [1957] 1985, *Social and Cultural Dynamics*, Revised and abridged in one volume by the author, With a New introduction by Michel P. Richard, New Brunswick and London: Transaction Publishers.
- , 1966, *Sociological Theories of Today*, New York and London: Harper & Row.
- 高城和義, 1992, 『パーソンズとアメリカ知識社会』 岩波書店.
- 吉野浩司, 2009, 『意識と存在の社会学 — P. A. ソローキンの統合主義の思想』 昭和堂.

本稿は、平成22～24年度、日本学術振興会科学研究費補助金〔基盤研究(c)研究代表者 大野道邦 課題番号22530520〕の交付による研究成果の一部である。